

靴の歴史散歩 ⑨2

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

日本で一番古い「靴の型録」というのが、靴業の祖・西村勝三のふる里、千葉県佐倉市に遺されている。正確には『伊勢勝工場造靴品類之図』（タテ26cm×ヨコ36cm銅版一枚刷）というものである。

右側三分の二に、乗馬用長靴、深ゴム靴など29点の靴の絵が描かれていて、左側三分の一には合番号による代価が、上中下の三等級に分け表記されている。

「右ノ定價ニテ各種御好次第精々念入製造可仕候且遠国ヨリ靴形文数ヲ以テ御注文ノ分ハ運賃等御都合ニ任セ通送可仕候尤モ十足以上御用ノ節ハ右定價表ヨリ幾分カ減省可仕候」と取引上の口上があって「東京築地壹丁目 伊勢勝造靴場」と結んでいる。

伊勢勝が築地一丁目（現・中央区役所の内）に工場を取得したのは、明治5年（1872）で、伊勢勝と社名を名乗っていたのは、明治10年（1877）の3月までであったから、発行年は明治5年から明治10年の間と推定できる。軍靴の製造で設立された伊勢勝が、明治6年（1873）には、広く一般向けの靴をつくるようになり、当時の新聞『郵便報知』に、詳細な広告を出しているから、あるいはその時の配り物であったのかも知れない。いずれにしても、日本最古の靴の型録であることには間違いない。

たいぶ前のことで申し訳ないが、この型録については「靴の歴史散歩」⑨で写真掲載している。

イメージ広告で事足りる和装履物と違い、注文生産で販売する靴は、より具体的な情報提供が必要だったので、伊勢勝の型録が示すように、当初から型録による広告販売が行われていた、と結論付けられるのではないだろうか。

長年靴の型録を蒐集していながら、引札との関連を結びつけられなかった点、大いに反省している。

それでも、無い物ねだりで追い求め、やっと巡り会えた、靴の引札が二点あるので、今回は先ずその内の一点をご披露したい。

『靴 カバン卸商 大阪心齋橋通博労町南入（現・大阪市中心区博労町の内）水原源治郎』（タテ25cm×ヨコ36cm 木版多色刷）の引札である。（写真参照）

泥鰌^{どじょう}ひげの中年紳士が、ポンチ絵（風刺漫画）風に描かれているから、明治中期頃のものと思われる。それにしても、明治初期ならいざ知らず、明治中期に木版刷とは、ずいぶん金のかかった贅沢な引札である。

